

## 堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐる

丸山 珪一

## はじめに

堀田善衛の短篇小説「曇り日」が書かれ、発表されたのは、戦後十年を経た一九五五年である。作中に「戦後十年と合言葉みたいに言われる昨今、おれが思い出し、考えている」という主人公の言葉があるが、実際戦後十年は単に切りのいい数字というにとどまらず、ある種転換の意識を伴って広く受け止められ、その後の歩みのために一つのまとまった時期として振り返ってみる必要が感じられていた。翌一九五六年度『経済白書』の「序言」に言われた「もはや戦後ではない」などは、それを鮮明に示す代表的な言葉であろう。「合言葉みたいに言われる」という表現は、そのような状態に対応しているとともに、他方でその受け止められ方への、主人公の何らかの違和感が含まれていることをも感じさせる。しかし彼自身も「思い出し、考えている」のであり、そしてそれこそが

この作品の内容にもなっているのであれば、堀田はこの「戦後十年」を強く意識して書いた、あるいはさらに、それをモチーフとして書いたと言ってもよいだろう。文末には「おれはおれの敗戦十年を記念して、このことをしるしておく。」とも書かれている。「このこと」の内包は、おのずから作品全体へと及ぶものとして考えられるが、直接には「心はしこっていたり、むすぼれていた、屈していたりしたのは、心というものに、ならない、心はのびのびとまっすぐな方がいい。」という言葉を受けている。つまり、しこった心、むすぼれた心、屈した心が堀田にとつて「戦後十年」を経て直面している問題であることを示す。「そのときおれの心は、屈していた。」というのが作品の始まりであり、作中でも何度か繰り返される。文脈によつては「奴隷」の心とも言い換えられ、屈伸に富んだ用いられ方をしている。「曇り日」というタイトルももとより天候状態を表わす言葉でなく、そのような主人公の、ひいては作者の心的状態を象徴的に表わす表現である。戦後十年を経て、期待された心の解放は実現しなかった、なお晴れぬ日々が続いている、という作者の思いがタイトルに予示されていると受け止めてよ

いだろう。それは何に起因するのか。そして私たちの現在、それはどうなっているのかを読む者に考えることを促す。この作品から六十年余を経て、それは変化したであらうか。

作者は、合言葉みたいに言われる「戦後十年」言説にも刺激されながら、それらとおのずから異なる「おれの敗戦十年」を書き留めておきたのだと思われる。その焦点は天皇制の問題にある。「よく、天皇は、あれじやまったく基本的人権もないみたいなものだね、と生活の不自由さ加減を推測して同情する人がある。しかし、とおれは考えた、商売とも職業とも、何ともつかぬものにならずさわる人と基本的人権とはどうかかりあいになるものか。」と作中に書かれているところなどは、「合言葉」というほどのものかどうか分からないが、作者の違和感が向けられている、その一端を示すものであろう。ここは作品によって投げかけられた重要な問いでもあり、後に忘れず立ち返ることにしよう。

「曇り日」は、最初一九五五年十一月号の『新潮』誌に掲載され、単行本としては『現代怪談集』（東京創元社、一九五八年刊）に収められた。『現代怪談集』というのは、

一九五五年から五七年にかけて書かれ発表された七篇の短篇集で、タイトル通り現代の怪談と言うべき現象に、いくつかの職業（航空機産業、石油業、詩人、官吏、銀行家、阿片捜査官）に即しながら迫った作品群を集めている。「曇り日」も、天皇という「商売とも職業とも何ともつかぬものにならずさわる」ような職業と見れば同類と言えないこともないが、天皇という「職業」ではなく、主人公の「おれ」の主観に即して書かれている点で、大きく異なっている。この本のなかで異色の短篇である。一九五〇〜七〇年代には出版社が競って日本文学全集を出し、この作品はそれらのなかにも少なからず収められていて、よく読まれたのだろうと推測するが、それにしてもこの作品を論じた批評がほとんどないのはどうしたことか。作品の「おれの敗戦十年」は、「おれ」の主観的な思い出をつづるスタイルで書かれているとはいえ、作者の「敗戦十年」に回収されてしまつてよいものではない。主人公と対話しながらじつくり読むべきであらう。

## 作品の構造と時間

作品は四つの部分から成り、一〜四の数が打たれている。以下、ここでは便宜上、第一節、第二節・・・・と書き表わすことにしたい。第一節は、朝鮮戦争の時期で、主人公の日常にもそれが及んでいる。第二節は、君臨していたマッカーサーが解任される前後の時期、第三節は天皇の「終戦の詔勅」をラジオで聞く八月十五日の前後で、主人公は上海にいる。第四節は作中に「一九五五年三月頃」という日付が出て来、新宿のバーにいる。作品の発表がこの年の十一月号の雑誌だったから、十月には店頭に出たとして、書かれたのは九月頃だろうか。作品の現在視点もそのあたりと見てよさそうだ。そうすると、おおざっぱに言って、作品は時間的に三つに分かれ、敗戦を知った戦後当初の時期、それから第二節が第一節の二ヶ月後とあり、ほぼ同期の一九五一年前半期、そして戦後十年経ての春という、ちょうど「戦後十年」の初めと半ばと終わりの時期が選り取られている。作者堀田自身の「戦後十年」も三つに分けることが出来、上海に滞在した一九四五〜四六年、帰国後占領下で暮らした時期

(一九四七〜五三)、講和条約で独立した日本での生活(一九五三〜五五)とすると、作品の三つの時期はそれぞれ堀田自身の三つの時期に対応している。堀田自身の変化に基づくものであり、それに応じて天皇の占める位置に変化があり、またそれに応じて「おれ」の天皇に対する態度にも変化が生ずるという関係になっている。こうして作品のテーマの天皇制問題は、まず時期区分による節構造として具体化される。作品の執筆現在から振り返って、「おれ」の天皇経験がそれぞれの時期との対応において表現される。

この作品ではテキストの節への分化が構造のもっとも大きな要素だが、そしてそれが時間によって規定されていることが明らかになった。しかし、節は四つあつて三つではない。第一節と第二節は、大きく言えば同時期に属するのだが、いわばマッカーサー更迭の以前・以後で区別される重要な変化を伴っているのである。一つの時期がさらに二つの時期に分かれたれ、二つの節になったわけだから、その意味では時期区分による節への分化という同じ原則が働いているということもできるが、必ずし

もそれだけで済まされない面もある。この二つの時期への分割は、日本の支配構造の変化には関わらないからだ。天皇とマツカーサーの繋がりには強かったが、更迭によって構造に基本的な変化が生ずるようなものではなかった。この二つの節への分化については、むしろテーマとの関係での「おれ」の思いの変化が決定的である。「曇り日」は、戦後十年を経て、「心が屈している」ことの淵源を求めて、天皇制問題に焦点を当て、天皇と関わったみずから経験を想起し、書き記して行くことから成り立っている作品である。つまり、作品の構造は、支配構造に関わる時期区分によって規定されるとともに、作者が主人公の経験をいかに配置するか、言い換えれば、作者が読者に対しテーマをいかに展開するか、という面からも規定されているのである。作品が出来事や想起する経験の生起する時間順序において語られるのではなく、たとえば戦後十年の半ばの時期に当たる第一、第二節が、戦後当初の上海時代に先立つのもこのことに由来する。

## 作品精読の試み

### 第一節 黒い巨人の事件、「魂の凍るような光景」

作品冒頭は、先述のように「そのときおれの心は、屈していた。」で始まる。いきなり「屈していた」という異化的表現である。異化というのは事態が尋常でないことの強調表現だが、すぐ次の文章に滑らかに続かず、そこから始まる節全体にそれとなく読者の心構えを向けさせる。「おれ」が何者かは節の最後で初めて分かるのだが、貧乏暮らしの物書きで、ある町のさかな屋の二階に間借りしている。三歳の女の子のいる三人暮らしである。もう一人は妻女だろうが、どういうわけか、作品にまったく顔を出さない。「おれ」の年恰好も分からない。小さな子がいるから、まだ若いだろう。「おれ」は女の子の手を引いて、朝パンを買いに出かける。店の奥に小児麻痺の子がいて、ドタリバタリと全身の力ではいっずつている。帰り道で具合悪いことに、右の足がブラブラしている、木の杖をついた少女と道で行き違う。戦争中に誤って工業用の油でつくられたテンプラを食べたために、神経が

麻痺しているのらしい。「おれ」は気持ちが悪く落ち着かない上に、子どもにも尋ねられたりすると、説明できそうもないので戸惑う。パンはついで買ったが、昼はさかな屋からマグロのナカオチをもらって食いつないでいる。しかもそのさかな屋からは、店をたたんでパンパン屋をやりたいと通告を受けている。この家の大家で、地づきのヤクザの京柳親分がそんなことを考えているようだ。町の隣のY市が基地の町であり、その米兵が目当てだ。Y市との間は山で、そこには無数の横穴が開いており、その穴全体が火薬庫になっている。夜中をすぎると、貨物列車が何千キロという爆弾をそこから運び出しては立川や横田へもついでいく。朝まで何度も目を覚ます。朝近くになると、逆方向から騒々しい音をたてて貨物列車がやって来て、朝鮮の戦争で壊されたトラックやジープや戦車などを積んでくる。Y市の隣に修繕工場があるのだ。

ある日、さかな屋二階の「おれ」たち三人がねころんでいる部屋へ、刑事が三人勝手にどさどさと階段を上がつて来た。ヨーコさんの家を見はるのに、「おれ」たちの部屋が恰好の位置なのだ。ヨーコさんは女学校出で、英語もしゃべる方は結構間に合い、パンパンで食っている。

繁盛しているようだ。刑事たちは「おれ」が執拗に抗議して怒鳴りまくっても平気だ（翌日再度の抗議に謝りに来たが）。その少し前、ヨーコさんの家に英文の手紙を書くアルバイトに行ったとき、脱走兵がいることに「おれ」も気づいていた。しかし「世に行動中の刑事ほど、おれの痛にさわるものはない」のだ。そういう場に出会うと、刑事の眼鏡のガラス玉にすぐとある男の顔がかさなって見える。「下ぶくれの頬っぺたをして、分厚い唇の上、鼻の下にヒゲを生やして、まるい眼鏡をかけた、発音が不自由な男」のことだ。「おれ」には、その名前を平静な心で呼ぶことが出来ないの、Qと呼んでいる。「われながら、不可解だが、どうにも避けがたく抑えがたく、そいつの、そのQの顔がかさなるのだから、不思議だ。何か骨のズイまで、達しているのだから、不思議だ。何かんなふうにして作品に初登場する。Qは、下ぶくれの顔からの連想であろう。この引用は、刑事とのつながりで、骨の髄にまで達するような仕打ちを身に受けた主人公の、戦時下の過去を想像させられる記述である。とは言え、具体的なことは何も書かれていない。

一週間後、MP「アメリカ軍の憲兵」の指揮による黒

人脱走兵狩りが行われる。「おれが生涯のうちで見たいちばん悲惨で、魂の凍るような光景」だ。ジープが二台やっつて来る。外に出てみると、裸の黒い巨人が、雪の積もった畑のなかの電信柱にしがみついている。MPたちは大型のピストルを持ち出してパーンパーンと撃ちだした。黒人をなぶりものにしてているのだ。日本の警官がタバコを吸いながら眺めている。黒い男は異様な声をあげて泣き出した。裸の黒人は誰にも声をかけられず、ぼろ屑のように放り捨てられた。まったく「人権どころのはなしじゃない。」しかし「こんなとき、裸の相手に、こんなことをするというのが、実は白い奴らの、そいつらの方が人生に対して犯罪人なのだ。」とまっとうな考えを吐露する「おれ」も含めて、眺めている大供子供たちは、血の気をなくして、なんの反抗の気配もない。やがて日本人警官がMPの指示で、ピストルをかまえ、黒い男を取り囲んだ。MPの乗用車がやって来て、黒人兵を連れ去った。

そのときおれの耳に「あれは、いかん！」という「おれの伯父さん」の厳しい声があった。伯父さんは東大を出た、古手の新聞記者で、戦時中フランスとドイツにいて、

やがてアメリカ軍につかまり、たくさんの監獄を経験して戦後帰国した。伯父さんはさかな屋の近くに一人身で住んでいて、米と肉をもって夕食をいっしょに食べるに来た。「奴らは敵味方ってことよりも、色の方での区別の方が深刻なんだ。問題は色なんだ。」と伯父さんは言う。「白人の世界で、長く暮した有色人の、痛切な心の屈折」が「おれ」に感じ取れる。伯父さんは、あのあと東大へ行って、皮膚科の権威と会ってきた。「注射一本で、黒い人間が白くなり、白い奴が黒くなり、黄色いわれわれもどうなど自由にかわりうるといふ、そういう方法は、あるいは希望は、ありうるものかどうか」をさぐっているのだ。「おれ」は、五十近い白髪の男が、それまで彼に縁もゆかりもなかった、わけのわからぬもののことを、情熱的に話すのを不気味に聞いた。「日本は、国際社会へ復帰するについで、平和憲法のほかには、なんにも土産にするものがないんだ。憲法と、もうひとつだ、この注射をもってゆけたらいい。」とも言う。そしてこれを題材にして、読んだ学者が感動して研究に一念発起するような小説を書き、ノーベル賞を取れ、と「おれ」を励ました。心が「屈していた」理由には、描かれた食や住や環境

の劣悪な事情の数々が属しているであろう。朝鮮の戦争と黒い巨人の事件もそこに関わっていた。そして人を人とも見ぬ官憲の態度の連想から、「おれ」の心の中に天皇が登場して来た。ここまでが第一節である。日常つき合っている人たちが一通り顔を並べている。なかで「伯父さん」は特異な位置を占めていて、小説の締めくくりにもう一度登場する。なお朝鮮での戦争が始まったのが、一九五〇年六月二十五日で、何度か休戦会談が行われたが、その後も戦闘は止まず、ようやく一九五三年七月二十七日に休戦協定調印に至った。

## 第二節 美質の構造、「マゲンスイって、お気の毒ねえ」

第二節は、やはりふさぎこんでいる「おれ」が、子供の手をひっぱったりおんぶしたりして、H町へ行く海岸添いの道を歩いているところから始まる。第一節の二ヶ月ほど後だ。小さな岬の突端にあるホテルが接収されて、米軍のオフィサーズ・クラブになっている。その裏のほうを行くと、庭が何千坪もありそうな、ばかでかい邸がある。それがQの別邸＝御用邸なのだ。平静な心で名を

呼ぶこともできない「そいつ」が「おれ」の心の底に宿って、「おれ」の足をここへ向けさせたのだろうか。オフィサーズ・クラブは、いつも楽隊がブカブカドンドンやっているのだが、今日はひっそりしている。一週間ほど前に、マッカーサー元帥が解任になったせいだ。ラジオでそのことを聞いた時、「おれ」は雨の中を出かけて、濠洲にある占領軍総司令部に足を運んだ。二時間もわけもわからず立ちんぼしたあとに、「マ元帥」の車がやって来た。そのとき周りの会話のなかに「マゲンスイって、お気の毒ねえ」という声が聞こえた。「マゲンスイが気の毒だって、どこを押したらそんな音が出て来るものか」、そういう「ボタンがどこかにあって、それがどういう歴史をもっているかということがおれにもわかる」、「それでもしかし、その音をあからさまに聞いて、いくらか元気を失った。気が、屈した。」「おれ」が足を運んだのは、きつとマッカーサー解任に対する人々の反応を知ろうというのだったろう。解任は一九五一年の四月である。第一節は二ヶ月前だから、逆算して一九五一年二月頃だったことになる。因みにマッカーサー帰国の日には、大使館から羽田までの沿道に都民ら二〇万人も見送った

しい。

その日の夜、さかな屋の親父とヤクザの親分がそろって二階へとんとんと上がって来た。二人もマッカーサーについて同じようなことを言い、そればかりか、「リッジウエ元帥に悪くないですかね」と言うのだ。もっぱら親分がしゃべる。「えらいお見送り振りだったつてえ、ラジオで言っていましたかね、そんなにしちやあ、リッジウエにわるかるうじやないかとね」。こんなふうにも多そうな声に口裏を合わせながら、要するに、マッカーサーが解任になった状況で、パンパン屋開業に具合悪いことがなければ、さつそくやりたいということなのだ。ヨークさんがほかのパンスケたちを「指揮」するためにここへ移って来て、「おれ」たちがヨークさんの家へ移るといふ案を、「おれ」は我慢して承諾した。ヨークさんの家は、もつと線路寄りにあるから、よほどの我慢である。そもそもそろって二階へ上がって来るというのは、不吉なものを持ち込んでくる、第一節の刑事を思い起こさせる書き方だ。「どきどき」と「とんとんとん」とでは音が違い、違うだけの意味もあるだろうが、大屋は店子や、ましてその間借り人に強い力を持ち、従うしかなかった

のだろう。

さて「マゲンスイって、お気の毒ねえ」に戻ろう。「おれ」は思う、「そう思うことは、それはたしかに美質だろう。美質の、その構造が、マゲンスイだのQだの、上の方からサアと矢のような恰好でもつて、↓、とこんな恰好で超音速で降って来て、心にぐさつと刺さる。と、心の琴線というやつが、うてばひびくでジーンと鳴る。そんな鳴り方を、おれの心も、するのだ。」上からのご意向が何の抵抗もなく、人々の心情にそぐうように変形されて受け止められ、有難がられる。そして「おれ」には気に食わないけれども、それが「おれ」の心の中でもはたらく。天皇制を国民の側から支える「美質の構造」のようなものが出来上がっているのだ。

「おれ」は金がなくてバスに乗れないのだが、眠った子供をおんぶして、バス停に立っていた。やって来るだろうと思う車を待っているのだ。人があまり通らないのに、やたらに自転車に乗った警官が通る。かつて御用邸を通過して海へ流れ出る川の上流に青酸カリを投げ込んだ奴がいたことがあり、用心しているのかもしれない。主人公がバス停に立っていることや、三歳の女兒を連れて

いることも審訊問をかわす対策に思えてくる。そのときジープを先導させて不意にやって来た。下ぶくれの、色のよくない顔が見えた。「それがぐつと近づいたとき、今度は、おれの方が不意に、右手を、後から考えれば、ハイル・ヒトラーみたいに、掌をひらいて、やあ、というみたいに挙げて、挨拶をした。」「手を挙げた途端に、実におれが、ぎよつ、とした。」「おれ」の挨拶に天皇もぎよつとしたように見えた。MPに守られて、何だ、と思われた気がしたのだろうか。天皇の口許の筋肉がぐつとひきつり、何か叫んだみたいで、「おれ」にあの黒人の絶叫を思い起こさせた。

「いまの、ひどく若い人たちのことは知らないが、ひどく若くはない人々は、それぞれにみな天皇のことをおのおの肉体のいのちに、じかにかかわるものとして考えたことがある筈である。考えたどころではなく、それは事実としてじかにかかわった。・・・いまはしかし、いのちのことは、措く。措くといつても、これを書いていまのいま、おれのいのちは、矢張り何かを感じて固くちぢこまっていることを、おれは白状しておく。・・・感じるどころの何かの正体は、いえは危険感にほかなら

ない。きざはしの下にたむろしている取次どもが何をするかかわらぬ、という漠然たる危険感、だ。」「おれ」はおのが「肉体のいのちに、じかにかかわるものとして」天皇のことを考えざるをえなかった世代だ。戦時下に青春時代を送り、第一節での脱走兵事件のようなことに遭遇すると、自分自身の内奥に強い痛みを感じる。ずっと上の世代、八十八歳のじいさんが田舎の家にいる。Qが地方行幸で回って来た時、コタツにもぐりこんでいるじいさんに「見に行かないのけ」と訊ねると、「いくさにまけたQなんぞ、だれが見たいか」と言った。烈々たる精神がその言葉の奥にあったのはたしかだが、コタツから出て、何かするというのでもなかった。「烈々たる精神」が何かは読者の推定に委ねられている。「勝った、勝ったと国民を欺きおって」という怒りであろう。けど若い世代はじいさんとも「おれ」ともちがっている、と「おれ」はここで思っている。世代による天皇に対する感覚の相違は、時代の移り変わりによる天皇制の位置の相違とも連動しており、この時期では上に立つマツカーサーとの二重の支配構造になっているから、少し複雑な問題である。先ほどの「美質の構造」の説明でも、「マゲンスイダ

のQだの、上のほうから」というふうにいっしょに括られていた。それに何よりも新憲法による象徴天皇制への移行がある。

第二節で、「おれ」は天皇を見に御用邸のほうへと出かけたなり、マッカーサーを見に占領軍総司令部へと出かけたり、たしかに行動的ではあるのだが、結果は、自分のなかにもはたらく「美質の構造」を確認したり、天皇に思わず挨拶してしまい、ぎよつとしたりして、やはり心が屈するのであった。そして自分にそうでなかった時期があったのを、その対極のような行動をしたことがあったのを思い出す。

### 第三節 「一生にいつぱん限りなき愛国心かられ…」

「おれ」は日本の敗戦前後上海にいた。八月十一日、朝目抜き通りにやたらに青天白日旗が目立つなと思いつながら、それがなぜかとも考えないで、日本の留學生時代から親しく、いまは大新聞の総編集をしているゴゲツ「呉珮」のところを訪ねて行った。そして「とうとうここまで参りました。日本が裏切ったとは思いません。・・・お

元気で」と言われ、日本のポツダム宣言受諾をはじめて知った。短波放送などで前夜のうちに日本の敗戦は知れ渡っていたのである。「そして、お元気で、というゴゲツ君のいい方のうちに、逃げるつもりらしいな、とおれは感じ、それならばご無事で、と祈りたい気持が、切ないほどに、急にこみあげて来た。そして同時に、逃げるのだな、という感じ方をした、そういうおれ自身を、汗が吹きだすほどに、嫌った。」日本の敗戦は、上海にいる日本人たちをまっさかさまに突き落とし、同時に日本に協力して働いていた中国人たちをも頼るべき何もものもない状態にしてしまった。そのもつとも優れた人間の一人であり、親しくもあつたゴゲツの別れの挨拶に、「おれ」は「逃げるのだな」と感じ、そんなふう感じたことで激しい自己嫌悪の念に襲われた。あるいはその「おれ」自身が上海へ来たことに逃げもあつたのだろうか。対等の協力者だったはずのゴゲツを自分が心のどこかで日本への従属者と見なしていたこと、しかも自分がまだ親船のうえに乗った気分であることに気づいたのである。このあたりは人と人との対等の尊重とそれが崩れることへの堀田の鋭敏な感覚がよく出ているところだと思ふ。

八月十五日がやって来て、天皇のラジオ放送を聞いた。いわゆる「終戦の詔勅」である。雑音まじりでよく聞き取れなかったが、負けたとも降伏したとも、ひとことも言わないのを、不審に思った。そのときはじめて「おれ」は、なんだか図々しいような、ひどいことばをつかえば、盗人ただけじゃないようなものだ、と思った。そしてゴゲツやいわゆる大東亜共栄圏に山という筈の、日本側に協力した人々に対して、天皇は何と挨拶をするのか、とそればかり気にして耳をそばだてた。けれども、遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス、それつきりだった。「何という奴だ。何という挨拶だ。お前のいうことはそれつきりか。嫌味な二重否定で、それで事は済むと思っているのか。そのほかは、まったくいまのおれのこの文章みたいに、おれが、おれが、おれの忠良なる臣民が、おれだけが可愛い、というだけではないか。」主人公のこのとっさの反応は彼の立ち位置を鮮明に伝える。その言わんとする心髄は、継いで彼自身の手で整理されて引き出されている。「これでは日本人が可哀想だ、と感じた。」のである。「何故可哀想か。これだけの挨拶では、日本人はゴゲツ君やそのほかの中国人やそのほか諸々の協力者に対して、それが

たとえどのような人物であれ、またどんな目的で日本側に近づいて来たにもせよ、だ。相対することが出来ないからだ。放送がおしまいになると、猛烈に腹がたつて来た。何ともいえぬ薄情さが、魂にこたえた。」人間としての判断をするときに、日本人の内輪のなかへひっこんではならない、相手がどんな意図かということを実に口実にしてはならない、これは一人一人の人間にとつてそうだが、まして日本人を代表する位置にある天皇がわが身本位であれば、日本人は立つ瀬がないのである。ゴゲツたちを中国の文学史が「漢奸」、民族の裏切者として扱うのは正しいだろう、しかしそうとしてもその正しさを、そのまま鵜呑みにする資格は日本人にはない。

しかし他方、詔勅の天皇に対する主人公の反応の仕方には、どこか身内に対するように、肩をゆすぶって口説いているようなところがある。「お前」という呼称もそれに見合うものだ。彼にもやはりもう少しまじなことが天皇の口から出ないかという期待と落胆とがあったにちがいない。そのあと彼は、天皇のことをいう、そのこと自体のなかに「親がかり根性」みたいなものがひそんでいないかと考えるようになるが、それは漢奸の問題を徹底

して考えつめたことから来ているのであろう。「そして海老が頭をしっぽにくつつけるほどに、屈した心で考えた、何か正確なことをここで一言、どうしてもいわなければならぬ」と思った。戦争の正当化でもなく、通り一遍の詫び言でもなく、言い訳でもない、自分たちがこんな運命におちいったことについて、正確なことを一言、天皇抜きで、言わねばならない、と。これを百万部も刷って、全中国に空からばらまこうという計画は、少なからぬ日本人の協力も得られ、思いがけずばやく実現しかけたが、印刷工場で結局受け付けられなかったために、頓挫した。これは「告中国文化人書」として、堀田のイニシアティブとともに今では読者に知られている事実だ。

「おのれの属している国というものを、ともに生きていく人民国民というものを、その歴史を、あんなにも全身で、ひたむきに愛したことはかつてなかった、天皇も、軍も、官も抜きで、だ。」これを「おれは一生にいつぺん、限りなき愛国心から動き出した」とも言う。漢奸の問題をめぐる、日本を代表すべき天皇と正反対の立場に至ったことから「愛国心」が生まれたのは、道筋としても爽快だが、核心は、上から降りて来る言葉に惑わ

されず、自分たちの言葉で正確なことを言わねばならない、と考えたところから、自分たちが日本の人民国民の歴史とともにあるという一体感を得たことにある。

国民党の漢奸追求が始まり、それに乗っかって漢奸を嘲笑したりさげすんだりする日本人たちに「おれ」は強い違和感をもつが、蒋介石のあの「暴にむくいるに暴をもつてせず」に対する日本人の反応にも同様のことを感ずる。蒋介石は日本敗戦の日の演説で、この古くからの言葉を引用し、多くの日本人に感銘を与えた。暴の代表的人物である蒋介石がそう述べたことにはその背景がある。とくに中国大陸に八〇万の日本軍がいること、共産党勢力に対しますます劣勢になっていることを抜きにそれを考えることはできないであろう。もつとも「おれ」の違和感は、「暴をもつてせず」を都合よく歓迎し、むくいられて当然の暴である自分たちの侵略の重みをどこかへやってしまっていることにある。それを歓迎する自分たちの「歴史的な資格」を問いたたすことを忘れている。天皇が天皇なら、臣民も臣民で、おれが、おれがなのだ。

#### 第四節 天皇と基本的人権

天皇にまつわるさまざまな経験を、戦後十年経って「おれ」が思い出し、考えているのが第一節から第三節までであったが、それらを一瞬に思い出させるきっかけになったのは、ひとつのざれ唄であった。第四節はその話である。一九五五年三月頃、新宿のバーに出かけたときのことである。もう十二時を過ぎていて、スタンドには「おれ」ひとり、椅子テーブル席に男が三人いて酒を飲みながら碁を打っていた。六十代半ばを越すと思われる爺さんが先生と呼ばれていた。碁が終わってその先生が細い声でうたをうたい出した。広津和郎原作の『女給』が映画化（一九三一年公開）されたときの「女給商売サラリトヤメテ」という主題歌の替え歌であった。そのうたのことが「おれ」の胸を衝いた。この日「おれ」は家を出るとき、精力増進剤をいくつも吞んでいた。それで一人で夜半にバーに姿を現わすのだから、それなりの思惑があったとしか思えないが、替え歌を聞き、歌詞を知り、歌が延々と続くと、どうやらその思惑ごと吹っ飛んでしまったようだ。マダムに書き取ってもらった歌詞は、

「天皇商売さらりとやめて／ながみやさんと二人のすまい／しらみつぶして小首をかしげ／ちんちんというたはいまはゆめ」というようなもので、えげつないのだが、そこにはあるあたたかさもある。だが「おれ」に言わせれば、「そのあつたかさが、いやなのだ。要するに、奴隷のうたではないか。もし反抗が含まれているとしても、それは一人前の人間としての反抗ではないだろう、奴隷の反抗だろう。ああ、いい加減にしないものかなあ、とおれが思った。やりきれぬ、たまらぬ。．．．おれのなかにもそういう奴隷がいるというのだ。」ここには「あつたかさ」という新たな観点が登場しているが、「おれ」はそれに背筋が寒くなる思いをする。奴隷根性をかぎつけたからだ。天皇への揶揄があるにしても、「一人前の人間としての反抗」とは無縁だと「おれ」は思う。しかしそういう「おれ」自身のなかにもやはりそんな奴隷がいることも感じている。「よく、天皇は、あれじゃまったく基本的人権もないみたいなものだね、と生活の不自由さ加減を推測して同情する人がある。しかし、とおれは考えた。商売とも職業とも、何ともつかぬものにあらずさわる人と基本的人権とはどういふかかり合いになるものか。基本

的というからには、商売職業、つまり暮しをたてる手段とかかわりなく、人権はそれこそ基本的に存在するものなのか。そうではなからう、手段の如何によつては、監獄に放り込まれ、自由を奪われるのではないか。」というのだが、この「おれ」の論理の運びには少し混乱があるのではないか。「商売職業、つまり暮しをたてる手段」によつて人権をもつ人と持たぬ人に分けることができるだろうか。基本的人権はどの人間もが持つという、近代が生み出した、人類の未来を拓くフィクションだ。「商売職業」以前の子どもにもあるのだ。天皇も基本的人権の目で人を見るようになるなら、天皇であることに耐えられなくなるだろう。しかしだからと言って、天皇に人権を否定するには及ばない。奴隷根性を剔抉し、「一人前の人間としての反抗」を支える論理としてせつかくたどりついた基本的人権の追求がここではその徹底性を欠いているのではないだろうか。

とはいえ、とにもかくにも天皇を基本的人権との関係で考える場においてことが重要だ。唄が「あたたかさ」をもつと思われるのは、天皇と国民との権力関係を捨象しているからであろう。何かにつけ、天皇の名のもとに

痛めつけられ、いのちの危険にさらされた戦時下の青春をもった「おれ」は、黒い巨人の事件での日本人警官や刑事たちにそれを思い起こし、「マゲンスイって、気の毒ねえ」という言葉に「美質の構造」を聞き取ったのだ。その論理は天皇への同情にも同じように働いているのだろう。厄介なのは、それに同調する気持ちが自分のなかにもあることだ。しかし敗戦時、上海にいたとき、漢奸の問題がきっかけになって、上から降りて来た「詔勅」の言葉に疑念を抱いた。上海に来て、「大東亜戦争」での日本軍の実態を目にしたこともその土台になっていたに相違ないが、それでも天皇は別だという思いは続いていただろう。中国の友人たちへの不誠実で薄情なその言葉がそれを揺るがした。「天皇も、軍も、官も抜きで」心底から自発的に動いたのは人生で初めてだった。そしてそれが上海在の少なからぬ人士をも動かし、実現しそうなところまで行った。これらのことの根底には、国家の危機、「大日本帝国」の断末魔ということがあったのであり、そのことをもちろん忘れてはならない。主人公自身、それを「美質の構造」を脱した唯一の機会として思い起こしているということは、その後国家を追い詰める、

あるいはそれに迫る場をまったく持てなかつたということでもある。いや、その後どころか、敗戦時のそういう場でも日本国民はそのような主導権を何ら發揮できなかったのであった。

黒人兵事件は、年配の国際ジャーナリストである「伯父さん」に、自らの痛切な体験に基づいて、ひたすら人種問題の解決策へと向かわせた。皮下注射で色を変えることによって人種差別をなくそうというのであった。しかし人種差別も複雑にからみあつた社会的差別の一環であり、何らかの技術の開発によつて一気に変えられるものではない。他方その同じ事件は、主人公をしてやはりみずからの痛切な体験に基づいて複雑な社会的差別の中心にある天皇制問題に向かわせた。「伯父さん」の激励は、ノーベル賞と関わりそうもないこの天皇小説を生んだのだった。

## まとめ

以上、作品テクストをできるだけ丁寧に追ひ、必要な引用もし、時にはコメントをはさみもして来て、おおよ

っぱには私が作品の要と見なすことを伝えられたと思うが、最後に私なりにそのまとめをしておきたい。

堀田の「敗戦十年」を記念する作品は、一言でいえば天皇小説であつた。しかし天皇や天皇制がそのものとして問われるというのではなく、主人公の天皇との関わり、あるいはもつと言えは、天皇との関わりで主人公が自分の経験や態度を想起し見つめなおすという風であつた。そうした天皇との関わりでの主人公の経験や態度は、戦後十年間の支配機構の三つの時期に照応している。①天皇に絶対的権力が集中していた時期——第三節がこの大日本帝国の最終時期を対象とするが、主人公は上海にいた。中国や「大東亜共栄圏」の対日協力者たちを薄情に切り捨てる天皇の詔勅に愕然とし、自発的に協力し合い、自分たちの思いを素直に伝えようといふまいに行動を起こす。また第一節は米軍占領下だが、黒人脱走兵の事件で、権力の無慈悲さと日本人の刑事や警官の態度が、青春の時期に起因する主人公の骨の髄に達するような痛みとその天皇とのつながりを浮き上がらせる。②第三節以外は、戦後の新憲法による象徴天皇制の時期だが、第一、二節は、占領軍が日本の国家機構に超越した権力

をもつていた時期である。第一節は、上述の通りだが、第二節では、マッカーサーの解任をきっかけに、日本人の意識の「美質の構造」が問題提起された。これは本論でも少し詳しく見たが、自分に対するマッカーサーや天皇の上からの恵みのまなざしを想定することで、救いと感動を得ようとし、そのために上への迎合的姿勢を強めるということであり、主人公はその広範な浸透ぶりを「心が屈する」ほどに知ったのである。③第四節は、対日平和条約と日米安全保障条約によって冷戦の一方の側に組み込まれる形で独立して以降の時期である。戦後十年を経て、主人公はバーで天皇を対象とした替え唄を耳にし、その歌詞に何の反抗心も感じ取れないことに困惑する。この屈した心を「おれの敗戦十年」に顧みて、これはいつたにどういふことだろうとあれこれ思い起こしながら書き記したのがこの小説である。

この小説から私たちが受けとめるべき最も重要なことと私が思うのは、主人公が自分もその浸透を被りながらも、同時にどこを押せば、その音が鳴るかが分かりもしている、そのメカニズムを捉え、読者に提起していると思える「美質の構造」の問題である。これは公が権力と

一体化し、見上げる存在となり、国民が見下げられることになじんで心地よくさえ感じている状態、そのためみずから主体として自発的に自分たちの歴史に関与しようとしないう状態と言ってよいだろう。作中ではあからさまに「奴隷」の心とも呼ばれていた。「見下げられる心地よさ」はそれによって作られる国民の多数者が内外の他者に対し排他的になり、見下す関係によって強められる。明治維新以降を一応日本の近代とすると、明治の初年代を除けば、ずっとそうだった。相継ぐ戦争がその「構造」づくりにより多大の寄与をしたに違いない。「美質の構造」はまるまる日本近代の産物であった。国民が自分もいっしょに作り上げたためにそこから破り出るのは容易でない。私たちの一人一人がその構造を見極めることで、主人公と作者の「屈する」思いへの深い共感を経て、その対象化をさらに具体的に進める場へ出ることが必要であろう。象徴としての天皇によって天皇制が権力機構の一端を変わらず担っていることが見えにくくなっていることも関わりがあるだろう。六十余年前の堀田の問題提起は、すでに象徴天皇制への移行がもたらした危機意識に発していると思われる。第二節には「これを書いている

いまのいま、おれのいのちは、矢張り何かを感じて固くちぢこまっていることを、おれは白状しておく。」と書き込まれていた。上海での経験は、自主性と相互協力の広がりがある歴史の大きな動きにつながる方向を示唆していた。あのとときあったひたすらな行動への広い共感はともかく、国家権力そのものの危機状況がその土台になっていたことは間違いないが、それは当てるにできることではない。自覚的持続的にその方向を追求することを促すものである。

もう一つ、作品から提起されていることに、基本的人権の問題がある。この言葉はいまだに私たちの日常になじんでいない。天皇のいわゆる「人間宣言」も、基本的人権は無縁だった。上から発した「美質の構造」宣言というに近い。作品の第一節には人権という言葉が一度登場した。この節はいささか奇妙な構成で、最初に身体障害者が二人登場し、その後パンパンのヨーコさんが現われ、それから黒人が出てくる。それらがどんなつながりをもつか明らかにされず、そこにQも出てくる。私は最後の節で基本的人権が天皇に対置されることから振り返って、ようやく、しかしなんとなく、そういうことな

かという思いに至った。身体、性、人種などで個人が周りからあらかじめ負荷された責任を負わされる状態というところが共通している。天皇もその同じ差別システムのなかで対極の特権的な位置を占めている。第四節の説明には少し混乱があったが、基本的人権は各人が人間としての尊厳をもって対等に向き合うことを主旨とする。これが日本語に、つまり日本人の生活になじむことが、「美質の構造」の打破に通ずる道であろう。この小説の最後の言葉はここにあると思う。

#### 〔付記〕

昨年の富山文学の会研究大会で、生誕百周年を迎える堀田善衛に小特集の企画がなされ、『曇り日』のことなど」と題する講演に臨んだが、話のマクラで終ってしまい、本題に入れなかった。本稿は、そのとき用意したレジュメ資料を基にしながら、それに大幅に手を加えたものであることをお断りしたい。